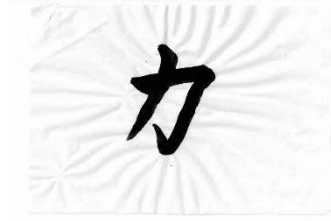
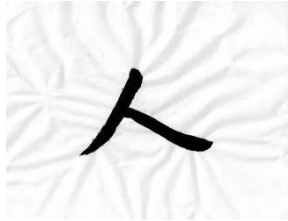


ナイアガラタイムス

発行日 2020年7月26日



目次

名盤探検隊

さだまさし「夢の轍」

美味な話 ②

美味しい真鶴の魚 那須雅代さん

シネマ滝 ②

『阪急電車～片道15分の奇跡～』
(2011年5月公開)

～THE極み～

動物病院の看護師さん

忘れられない一日

「ニューヨーク マンハッタンの記憶」
2001年9月11日
磯部 伸之さん

『名盤探険隊』

【さだまさし「夢の轍～わだち～」(1983年1月発売)】

さだまさしがソロシンガーになって、「あまやどり」「関白宣言」などのヒット曲を飛ばし、ヒットメーカーとしての地位を確立した。その後も、「さきもりの詩」「道化師のソネット」などのシングルを発売していった。そんなヒットシングルを連発していた最中に、さだが発売したアルバムが、この「夢の轍」だ。

そんな時期なのに、シングルは一切収録されていない(ゴメンナサイ、今調べてみたら一枚だけ「退職の日」というシングルが収録されていました。これも光景が目に見えそうな曲だ)。きっと、さだは、アルバムの世界感を大事にしていたのだろう。

さて、本題に入るのだが、こんな短篇小説のようなアルバムは今まで聞いた事がない。46分の中で繰り広げられるいくつかのドラマを紹介してみると、付き合っている男性から「オイ、結婚するぞ、それから、オレ仕事辞めてカメラマンになるんだ」と矢継ぎ早に言われ、「気絶しなかったのが不思議だったわ」と始まり、本当にカメラマンになって、オーロラの撮影中にあまりにも夢中になっていてヘリコプターのプロペラが止まっている事に気づけなくて、そのままオーロラになってしまったという曲。いつも酔っぱらっていて、しょっちゅう足をぶつけて足を擦り剥いてばかり、周りに「バンドエイド持っている？」と聞いてまわって「お酒やめればいいのに」と尋ねると、「酒なんて大嫌い、だけど男よりはマシ、そうね100倍はマシ」と言い放つ、でも最後には「淋しい」とつぶやく女性を描いた「まりこさん」という曲。

そして、このアルバムが発売になってから四半世紀以上経ってから、ある裁判で裁判官が、被告に向かって「この曲を聞いてみなさい」という事で注目された「償い」という曲。

是非、この暖かい短篇小説集を聞いてみてもらいたい。



『美味な話』 ② 美味しい真鶴の魚

美味しい魚が獲れることで有名な真鶴は日本三大深湾（富山湾、相模湾、駿河湾）のひとつ、相模湾に突き出た小さな半島です。海は深く少し沖に出れば水深はすぐ数百メートル。この半島には、楠や松、スダジイの巨木が生い茂る大きな森があります。古くから”おはやし”と呼ばれ大切に守られてきたこの森は、明治時代には「魚付き保安林」に指定されています。半島を覆う森の樹木の栄養が海へと流れ出し、真鶴の豊かな海にはたくさんの魚たちがよりつきます。

真鶴漁港には毎朝新鮮な魚が水揚げされます。大型定置網もあり年間を通し揚がる魚の種類は300種にのぼります。秋は、カマス、イナダ、むつ、イサキ、メジナ、サバ、カンパチ、わらさ、さわら、金目鯛、タイ、いわし、あじ、鯖、さざえ、チタイ、いか等々です。先日はマグロもあがり喜びました。

真鶴漁港の漁協直売所では上がった魚の一部を毎朝9時半頃から私たちに直に売ってくれます。でも、それよりも前の7時ころから買う順番を登録しに行きますので、ちょっと大変。我が家は漁港の徒歩圏内ですが、小田原、湯河原町など隣町からも車で買いに来ます。

私は、お酢と昆布でめしたしめ鯖をつくり冷凍して作り置きします。小さなイワシも200匹くらいまとめて干物にしています。新鮮な魚は刺身は勿論、めしても、煮ても焼いても、揚げてもそして、干しても美味しいです。

天候とか潮の具合により、漁獲量の少ないときは直販所は休み。そんな日は「漁師さんも結構大変だなあ」と船の少ない海を恨めしく眺めています。

都会には日本全国からの魚があつめられますので、真鶴産の標記を見ることは少ないでしょうか。是非とも真鶴まで足を運んでください。美味しい地元の魚を食べさせる食堂、レストラン、料理屋、すし屋も多くはないけれどそれなりにあります。海辺の散歩とともに”おはやし”と呼ばれる森の散歩コースも歩いてみてください。

そうそう、真鶴の町なかの魚屋さんで魚を買うときは「朝獲れ」とか「地上がり」の表記のあるものをどうぞ。



（真鶴在住 那須雅代）

『シネマ滝』 ②【阪急電車～片道15分の奇跡～】（2011年5月公開）

昨日、この映画のDVDを久しぶりに観た。観てからしばらくの間、心がホカホカしていた。その映画の世界をみなさんと見ていきたい。

「ホカホカする映画」と言ったけれど、実はこの映画、大修羅場から始まる。翔子（中谷美紀）の前に、突然、3年間付き合ってた結婚まで決まっていた彼が、他の女性と目の前に現れる。そして、「オレ、彼女と結婚するから」と彼女の手には母子手帳が……。そう、翔子は、マリッジブルーになっている間に寝取られたのだ。翔子は最後に「いいわ、分かった。ひとつだけ条件がある。結婚式には呼んでね」と告げる。式の当日、翔子は、新婦が着る、真っ白いドレスを纏い結婚式に参列するのだ。当然、周りからは白い目で見られ、式場の人から『花嫁様からの伝言で「あまりにも目立つのでブランケットをお召しになって下さい」』と告げられ、帰る事にする。真っ白いドレスを着て電車に乗るのだ。目に涙を溜めながら……。

この映画は、兵庫県の所要時間わずか14分のミニ路線で、乗客が繰り広げられるエピソードを1往復16話で描写していく。

小さな物語が沢山あって、どれも素敵なのだが、滝のお気に入りな話を紹介してみようかな。

関西学院の自衛隊ヘリオタクの彼と、野草が好きな女の子とのカップルの話。同棲している彼のDVにあっている女性の話。息子のママ友たちに思い切り振り回されている主婦の話。

それぞれの話が、本当に綺麗に絡み合っている。それをまとめていくのが、宮本信子だ。ものすごく上品な、おばあちゃんなのだから、このおばあちゃん語りが暖かく鋭い。この人のセリフの中に生きていくヒントがてんこ盛りなのだ。

あまりうまく「ホカホカ感」を伝える事が出来なかったが、この映画、レンタルでも配信でもいいから、是非、滝が味わった「ホカホカ感」を体感してみたい。



『～THE極み』

2回目の「THE極み」は、どうしようかなと思ったが、このコーナーは、読者の皆さんと一緒に色々な世界を見ていきたい。そこで今回は、滝のオフィスの近くにある動物病院の看護師さんをお願いする事にした。

ただ、滝が出勤する時に挨拶していた間柄だけなのに、ナンパのように、いきなり手紙を渡して、取材をお願いしてみた。最初は、ものすごく困惑させていたが、「匿名なら」ということで、取材に協力して下った。

さて、今回はどんなお話が伺えるのか。

滝：今日は雨の中をありがとうございます。2回目の『極み』です。よろしくお願いします。

看護師：こちらこそよろしくお願いします。

【何故、今の仕事を選んだのか】

看護師：小さな頃から犬を飼っていて、もともと動物が好きだったんですけど、一旦、高校を卒業してから、一般の事務に就職したんです。自分で働くようになり自分の給料でポメラニアンを飼いました。

そのこはポメラニアンなのでポーと名付けました。私が小さい頃に飼っていたワンちゃんは MIX 犬でジョンという名前です。外で飼っていて 年一回の集合注射の 狂犬病注射だけしていました。私の小学生の頃は外で飼われているワンちゃんが ほとんどでした。なので 私が就職して 飼ったポーは 初めての室内犬でした。

昔のジョンとの飼い方とは 違い、ポーは狂犬病注射だけではなく フィラリアの予防や混合ワクチンなど いろいろ 動物病院に行くことが多くなり 動物病院に 興味をもちました。そして今の仕事に就く事になったんです。

滝：獣看護師になるための学校とかあるんですか？

看護師：動物看護師になるための学校はあります。学校によって 一年制、二年制、三年制、まちまちです。昔は、今ほど 動物看護学校の数がなかったので、特に 学校に行かなくても 動物病院に勤めることができました。今は、ほとんどのみなさんが 学校に通われてから 動物病院に勤めています。動物病院には 犬の美容室〈トリミング〉も併用している病院もあります。犬の美容師〈トリマー〉の 学校でトリマーの資格をとって動物病院に勤めている方もいます。

私はトリマーの資格もとれる二年制の動物看護学校を卒業して動物病院に勤めました。今は 全くカットはできません。やはりカットは技術が必要なのでハサミを持ち続けないとダメですね。

今は 動物看護師には 資格は 必要ありませんが、2～3 年後には 資格が必要になるみたいで いろいろ変わってくると思います。

【仕事のやりがい、醍醐味は】

看護師：いろんな動物と関われるので、それがすごく癒しになっています。

その他に 体調を崩して 通院や入院していた ワンちゃん、ネコちゃんが 治療して 元気いっぱいになる姿はとてもうれしいです。ワンちゃん、ネコちゃんだけではなく 飼い主さんもとても喜んでくれるので 私のうれしさも 倍増します。

滝：家では、なにか動物は飼っているんですか。

看護師：犬を3頭飼ってます。ポメラニアン2頭とシーズを1頭です。

ポメラニアンのアラレという女の子は9歳です。とても神経質なポメラニアンで花火の音や雷の音が苦手です。とても優しい温和な性格です。もう一頭のポメラニアンはガンモという男の子で4歳です。とても ヤンチャ坊主です。「アラレ」はドクターランプアラレちゃん、「ガンモ」はグーグーガンモという漫画から名付けました。昔のマンガです・・・。

シーズのいちごは女の子の5歳です。2年前に保護犬カフェからの里親になりました。前に亡くなった春香というシーズにととても似ていたので里親になりました。とても 気が強いおてんばさんです。

もともと、アラレとガンモがいて、あとから、いちごが加わったのですが 最初はどうなるものかと心配でした。しかし意外と簡単に仲間に加わりました。一応、3頭 仲良しさんです。ただ、たまにガンモといちごは本気のケンカをするので注意して見守っています。

初めて給料で買ったポメラニアンのポーから数えてアラレは四代目、ガンモは五代目のポメラニアンです。

いちごは 二代目の シーズです。

【仕事での葛藤、悩みは？】

看護師：同じ仕事を20年やっていると、20年前の自分と今の自分では体力が変わってくるので、大型犬を診察台に持ち上げる時、一層力が必要になったり、何気ない動作で今までにギックリ腰を2回やってしまいました。ギックリ腰は 通常の生活をしていてもみなさんやっつけてしまっているので 仕事とは関係ないかもしれませんが。自分の体力が落ちているのがよく分かります。こちらとしてはワンちゃんやネコちゃんのための 治療をしていることでも、ワンちゃんやネコちゃんにとっては押さえつけられていろいろやられるのでとても暴れてしまったり攻撃したりもします。それは 仕方がないことです。ワンちゃんやネコちゃんは何をされているのかわからないからです。言葉で通じないのが難しいです。逆にワンちゃんやネコちゃんの思っていることがわからなくて難しいです。

滝：飼い主さんが飼えなくなった時のフォローアップは、どうしているんですか？

看護師：基本的に今、犬も気安く飼う事が出来なくなっている。たとえば、年齢制限があって、お年寄りの方が動物を飼おうとすると、ペットショップの方で「申し訳ございません」という事になっている。それは、ワンちゃんを看取

るまで飼わないといけないという人間の使命があるんですね。ワンちゃん
ネコちゃんを 飼うと いうことは 一生涯 そのこを 看取るまで 面倒を み
なければなりません。もし飼えなくなってしまう可能性があるのでしたら、
事前にご親戚の方や 友人知人に 相談をしておくことが大切です。

昔は「保健所に持って行け」という時代だったんですけど、今は、もう神
奈川県でも相模原市でも、殺処分がゼロになっている。ボランティアさんが
色々活動していて、ワンちゃん達の幸せを願っているの、そういうフォロ
アップ体制が出来たのだと思います。

【趣味は？】

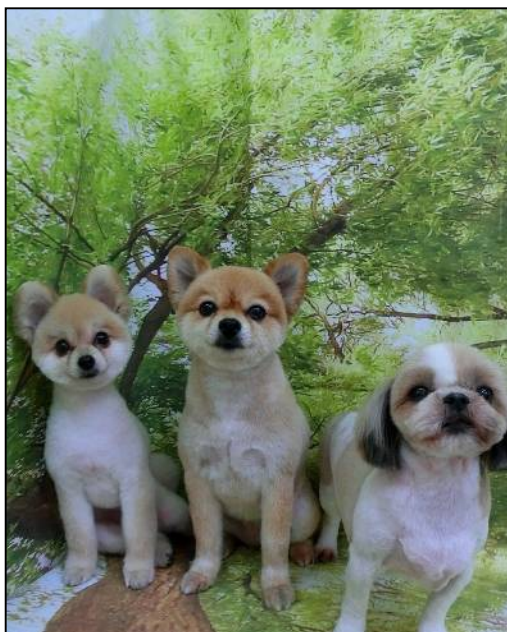
看護師：休みの日は山登りをしたり、自分一人では行かないんですけど、今3才にな
るポメラニアンがいるので、その子と一緒に山に登ったり、川原に行ったり
するのが好きですね。

滝：犬と一緒に登るって、どこの山？

看護師：一番好きなのは高尾山で、高尾山は、結構色々コースがあるんですね。一号
だの二号だの。人が歩きやすい散歩道もありますし、動物達が好きな自然な
道もあって、自然な道を行ってますね。ただ、うちの犬は、人とか犬を見ると「ワンワン」吠えてしまう、しつけがなっていない犬なので、なるべく人を
避けて行ってます。こういう仕事をしていても、自分の犬は別物なので、ち
よっと患者さんには見せられないような犬です。

【これから動物達が、幸せになるためには】

看護師：動物は、人がいないとやっていけないという現実がある。今、保健所で処分が
ゼロという事は、それなりに社会が動物のためを思ってくれているから出来
ている事だと思うんです。もっともっと人間が「動物だから簡単に殺処分を
する」という思いがなくなるという事。動物保護法というものはあるんです
けど、愛護法がなくても、人が動物に優しくなれる社会になればいいなと
思います。



らくがき

滝は障害者。食事をするのにも介助が必要なほど「ガチな障害者」である。だからこそ、このナイアガラタイムスでは、あえて福祉は取り上げずに皆さんと広い社会を見ていきたいと思っていた。

さらに、前回の「THE～極み～」では、直感で取材をお願いした日高さんにインタビューさせてもらったら、これ以上、福祉を語れる方はいないと思い、まさに福祉の極みを味えた。そして「福祉」からは、しばらく離れようと思っていた。

だが今は7月、どうしてもあの事件の事を書かない訳にいかない。そう、4年前の津久井やまゆり園事件だ。

これは、19人が殺された大量殺人事件というのはご存じの通り。犯人の元職員の植松という男は「障害者は不幸を生み出す事しか出来ない」と言っていた。マスコミでは被害者を匿名で報じられ、その結果、犯人の事ばかりクローズアップされていた。今年の3月に犯人の死刑が確定され、おそらくこれから先、この事件がマスコミで取り上げられる事は、まずないだろう。

さらに、毎年7月に行なわれていた障害者の集会も、今年はコロナ、来年はオリンピックの真っ只中で開かれないだろう。

こんな大きな事件なのに、人の記憶から消えていってしまうのだろうか。

障害者芸人のホーキング青山の著書「考える障害者」の中で、この事件の事が書かれている章がある。その中に、『我々障害者が「自分は、何故、生きているのだろう」なんて考え込む必要はない、だって、人は生まれてきちゃったからには寿命まで生きていたい。それは当たり前の事だ』と。これは、あまりにも単純過ぎるだろうか。けれども、滝はこの言葉にやけに納得させられた。

人は、なにがあっても、一人の「個」として認められ生きていく権利があるのだと思う。



『忘れられない一日』 2001 年 9 月 11 日

～ ニューヨーク マンハッタンの記憶 ～

僕は、今、社会福祉法人アトリエで働いている。

2001 年 9 月 11 日には、ニューヨークのタイムズスクエアの近くにいた。

ニューヨークには、演劇を学ぶため 2 週間の予定で滞在中だった。

滝編集長に日付を指定された「忘れられない 1 日」。

娘さんが結婚してニューヨークに住んでいる方と滝編集長の前で 9.11 の話していた事で依頼を受けた。当初は、ニューヨークの出来事より僕の心に未だに切なく残る一日を書きたくなった。天邪鬼が顔をのぞかせたのかもしれない。編集長に原稿書くことは快諾したが、日付指定されることの不快感を伝えた。でも、僕の天邪鬼は、あっさりと去った。滝編集長から父親の体験を聞いたからだ。滝編集長の父親には、あの日にアメリカへ野球を見に行く旅の計画があったと言う。テロ事件でキャンセルになったそうだ。話を聞いて、大きな出来事は、様々な記憶や体験とつながっていると感じた。ビルに衝突した飛行機の映像から蘇る記憶があるのであれば、その同時に個々の様々な経験にもつながっている。

様々な沢山のドラマとつながっている。つながりを感じてみたくなった。

この文章を読んでいる皆さん。あの日、2001 年 9 月 11 日に何をしていましたか。どんな思い出があるのでしょうか。

この頃僕は、相模原市社会福祉事業団で支援費制度の稼働前のガイドヘルプサービスの事業のコーディネーターやガイドヘルパーと日常生活支援の相談をやっていた。非常勤で時間にゆとりがあるので、政治家の事務所の手伝いや経営難の事業の請負等をしながら、殺陣の稽古場を兼ねた俳優の事務所に所属していた。その事務所では、僕が求めている内面に向きあう事を学べずに、別のワークショップに通っていた。そのワークショップの主催者が青井陽治さんだった。青井さんは、劇団四季にいたこともある。表面的な芝居よりも内面からにじみ出る演技を引き出す演出家だった。青井さんは、ワークショップ参加者をニューヨークへ連れて行き、学びの場に使っていた。

青井さんが 2017 年 9 月 1 日に亡くなっていたことを、今、Google で知った。PARCO 劇場のこけら落としで「ラヴ・レターズ」が上演されると新聞で読んで、活躍なさっていると思い込んでいた。

芝居や演劇で人の内面に向きあっていた方でした。

合掌。

2001 年 9 月 11 日 マンハッタン 短期契約のアパートの一室。

飲みすぎか、体が重い。時計を見る。「9:04」
「やっちまったー。」8時に約束があった。

9 月 10 日 18:00

ステーキハウスにひとりで入った。
メニューに×× JIM BEAM、×× I.W. HARPER などと書かれたステーキが並ぶ。
××は前置詞。[with]な気がするけれど確かではない。
[in, on] かもしれない、文法的な正解もわからない。
「ああ、バーボンと飲み物のセットだ。」勝手に解釈した。
価格は、バーボンと一緒に安い。
「×× WILD TURKEY」を注文した。
「飲み物は？」と聞かれる。
「あれ？バーボンついてくるんじゃないの？」
「焼く時に使うバーボンだ。」
悔しい。僕の心もフランベされた。
飲みたい気持ちは、ステーキさながら火が着いた。
滞在は、あと2日の予定。この学びの資金は、出国前に経営した江の島西浜での
134号沿いに構えた小さな海の家のような鉄板焼屋での利益だ。それは、手伝って
くれたルミちゃんの活躍のおかげ。そのルミちゃんが好きなバーボン「OLD CROW」
をロックでチェイサーと共に注文した。

9 月 11 日 9:04

散々な散財な結果なようだ。何杯飲んだかの記憶もあいまいだ。
いや、僕は舞い上がっている。数日前にセントラルパークでジョギングをして足を
痛めた。
それで、昨日行ったメディカルセンターでもらった痛み止めの薬を飲んでいた。
痛み止めとアルコール。絶対ダメな組み合わせなのかもしれない。いたた…痛みは
足と言うより心。ベッドから飛び起きて、脱ぎ捨てていた洋服を身につけ、アパー
トのロビーにかけ降りる。痛みが戻っている。足を引きずりロビーに立つと、日常
なのに、なにか違和感がある。
管理人のデスクに置かれた小さなテレビ画面をロビーにいる誰もが啞然とみつ
めている。画面にニューヨークの象徴的なツインタワーの1棟が煙を上げて写って
いる。

映画か何かであろうか。

「What's up?(どした?)」顔見知りの青年に声をかけた。
「It's a real now. suck …(現実の今だ。くっそ。)」表情からの感情が読み取

れない。

昨日見上げた 2 棟のノッポビル WTC(ワールド・トレード・センター)1,2。訪れたメディカルセンターは、WTC7か9のビルにあった。そのビルのセキュリティは、パスポートを渡して、入館目的を申告し、当日のみ使用できる写真付きの ID カードの発行を受け、金属探知機を通らないと入館できないほど厳重だった。画面に煙が上がっていない別棟に飛行機が衝突する瞬間が写る。

ロビーの人々なのか、街の声なのか、近くに遠くに悲鳴、叫び、ため息が入り混じった音を感じ、鳥肌が立った。昨日、体験した高度なセキュリティが無常だ。

一方、僕の今の現実には、青井さんとのブロードウェイにある劇場の舞台裏を特別に見せてくれる約束の待ち合わせに遅れたこともある。ロビーで合う予定だった。1 時間以上も遅れれば探しても、その顔はなかった。劇場の場所は、分からない。とにかくブロードウェイへ杖をついて急いだ。

けたたましく何台も消防車が走り去る。

上空を飛び交う戦闘機の轟音(マンハッタンでその音は聞いた事が無かった)。

不安に見上げる人々。

電光掲示板に「WAR」の文字。その後は、記憶の時系列も体験も混沌としている。



「テロに屈しない。」とすぐに開いたミュージカル等の劇場。翌日からもやっている劇場もあったと記憶する。9月11日以降では、終演後、エンターテインメントの枠におさまらない観客の反応が幕のたびに巻き起こった。そこでは、観客の生きる意欲が共鳴していた。人は、衣食住だけでは生きていけないと痛感した。

友人が撮ったコンクリート色の煤に埋もれた車とゴミ箱が写っていた写真を見た。破壊された衝撃の大きさが写っていた。その友人は、出来るだけWTCの近くまで、ほとんど止まる地下鉄を駆使し、封鎖された道をかいくぐって近づいたと息巻いていた。今のようにスマホが普及していたら、ジャーナリズムというより、好奇心の餌としてもっと多くの画像や映像が巷にあふれているだろう。

WTCの地下にある僕が土産を買った時計店はコンクリートに埋もれただろう。

気さくなイタリア気質の恰幅のいい店主が無事に難を逃れたかどうかの知るよしもない。

閉鎖された橋。閉鎖された空港。ユニオンシティへ帰路を求めた行列を見たうっすらとした記憶。多くが壊れて、何かが生まれた。何かは人の心に宿った。数日後「NO WAR!」とプレートを持った行進に出会った。

その行進に「Fight against terrorists!」と叫び声をあげる人がいた。対局して何とかバランスを保つアメリカ社会を肌で感じた。

空港の閉鎖や航空機の発着の乱れで日本へ帰国できずに滞在が伸びた。

9月13日

ブロードウェイで「ロード・オブ・ザ・リング」のガンダルフ役のイギリス人俳優イアン・マッケランにばったり出会った。その時、正直、僕は、誰だか知らなかったけど、青井さんは、知り合いだった。そして、翌日のドレスリハーサルに招待された。

9月14日

マッケラン主演のストレートプレイの芝居はシュールで詩的なセリフの英語の意味は分からず、夢以上に異世界に入った。いや、多くの時間で寝ていたのかもしれない。でも、退屈で寝たと言うより、劇場の空気になった気分だ。観客の息遣いに同調していた。

9月15日

誕生日を祝った記憶はない。

帰国はいつだったのか。落ち着くまで滞在したと思う。それでも帰りの空港で公衆電話がつながらなかった。フィリップモリスだったと思うラウンジの電話が通じると教えてもらい無償で貸してもらえた覚えがある。日常が他の価値観を持った人類の遺恨による攻撃で奪われた日々。

その記憶は、不思議に断片的で混沌としている。

この文章に載せる写真の為に実家へニューヨークで買った9月12日発行の「ニューヨークタイムス」と「ニューヨークポスト」を探し出した。つい、読み始めてしまう。

燃え上がるビル、衝突する飛行機、ビルから落ちる人、血だらけの人々、瓦礫と煙と炎の中の消防士。対比させるかのように、アラブの人々の歓喜の表情、右手に銃を、左手にVサインを掲げるレバノンの男性。梅雨空に飲み込まれて胸が重くなった。ひとりで憂鬱になってしまう。



今、世界中が新型コロナウイルスにより日常が変わりつつある。日本の各地でも地震や豪雨災害で多くの方が日常を奪われている。暴力、戦争、災害、天災…いつでもどこでも切ない事は起こる。それを真摯に受け止める。生きる勇気が欲しい。切ない。

僕の耳に笑い声が届いた。今、僕は、「一から百まで堂」にいる。笑いが絶えない場所だ。

灰色の世界が、にわかに明るく色彩豊かになった。

知的障害がある彼らはこの世の光だ。

(磯部 伸之)

【編集後記】

九州の豪雨で被害にあわれた方々のお見舞いを心より申し上げます。

この頃、テレビのニュースを見ていると、中国も九州も、ものすごい豪雨で多くの人達がものすごく苦勞されている。亡くなられたり、行方不明者の方も出ている。私達に出来る事は、少しでも早く雨がやむ事を祈る事ぐらい。

そして、新型コロナウイルス。この星（地球）はどうなるのだろうと思ってしまった。けれども、様々な人達が知恵を出し合って少しでも自分らしく暮らしていこうと、支援しあったり、「世の中って、こうやってまわっているんだ」という事を改めて感じさせられた。

それにしても、九州の雨は早くやんでもらいたい。

さて、今回のナイアガラタイムスは、本当にあっという間に出来たという感じで、こんなに早く届けられるとは思っていませんでした。それも「THE～極み～」の取材をうけて下さった看護師さん、インタビューの時も、滝がうまく話を聞き出せずにとりあえず文字にしたものをメールで送ったら、「これを追加して下さい」というメールが、これがとっても素敵で「これを早く皆さんにとどけたい」と思い、このような運びにさせて頂きました。

最後になりましたが、真鶴の風景が浮かんできそうなコラムを書いて下さった那須さん、ニューヨークでの貴重な体験を書いて下さった磯部さん、そして、取材に協力して下さいった看護師さん、皆さん本当にありがとうございました。

発行所 相模原市中央区横山 4-5-4-107

発行責任者 大滝 英史

メール：nb060234-1625@tbk.t-com.ne.jp

 0 4 2 (7 5 5) 9 1 0 5

発行協力 社会福祉法人 「アトリエ」 一から百まで堂

相模原市中央区相生 4-13-5